中国東北地域の民族関係をめぐる社会史的考察

－民族雑居地域でのフィールドワークを通じて－

代表研究者：李海燕（東京理科大学・専任講師）
共同研究者：韓敏（国立民族学博物館・教授）
共同研究者：リンチン（内蒙古大学蒙古学研究中心・准教授）
共同研究者：劉正愛（社会科学院民族学与人類学研究所・研究員）

はじめに

周知のように、民族紛争は普遍的に存在しており、ときには世界規模の広がりを見せる。それは中国においても同様であり、民族問題は国家原理の中核的矛盾として存在し続けているのである。本研究のフィールドである中国東北地域は、清王朝の発祥地であったことから長らく封禁政策が取られてきたが、19 世紀に入ると封禁政策が緩み、漢民族が大量に移住した。また「満洲国」時代には、朝鮮人や日本人の移民も増加した。

そして第二次世界大戦の終了後、まもなくして中国共産党は東北地域に根拠地をつくる戦略を立て、1945 年 11 月末までに 2 万人の幹部を送り込んだ。そして国民党との内戦を経て 1948 年 11 月には東北全域が中国共産党の影響下に置かれ、1949 年 8 月には「東北人民政府」が樹立された。中国共産党の勝利は、この東北地域での社会改革を通じた成功から始まり、その経験がやがて全国レベルに拡散したのである。他方、内モンゴルは、現代中国の対少数民族政策が最も先行して実施された地域であった。中国共産党の少数民族政策の核心である「民族区域自治法」は、1947 年に設立された内モンゴル自治政府を雛型にして作られたものであるが、これ以外の統合政策の多くも内モンゴルでまず実施されたのち、ほかの民族地域に広げられるというプロセスをたどったのである。このように、戦後の中国東北地域と内モンゴル地域についての研究は、中華人民共和国の民族問題と民族政策に対する研究の基礎をなすものである。

これまでにも毛里和子『周縁からの中国―民族問題と国家』（東京大学出版会、1998 年）、王柯『多民族国家　中国』（岩波書店、2005 年）、加々美光行『中国の民族問題―危機の本質』（岩波書店、2008 年）などの先駆的な研究が行われている。これらの研究は、政治・文化・思想の各方面から民族問題を論じた点で大きな意義を持つが、少数民族社会の内部、特に地域の末端レベルの研究はまだ充分とはいえない状況にある。研究

者が中国の地域社会でフィールドワークを行うことにはさまざまな制約があるものの、民族問題を中央政治などのマクロな側面からのみ分析することは、資料等の制約もあり限界を見せている。また、民族問題をめぐってはそれぞれの地域・民族のミクロな内情や周辺民族との複雑な関係が存在するため、社会学的なアプローチが一段と重要になっているのである。

本研究では、東北地域と内モンゴル東部の民族雑居地域におけるフィールドワークを通して、マイノリティの視点から地域社会における民族関係の実態を解明し、社会史的な考察を行う。民族関係は、それを取り巻く政治・社会・文化的環境に関して、「自らをどう認識し、他者をどういう目で見るか」という各自のアイデンティティにも関係しているからである。

本報告書は、次の三つの部分から構成されている。①内モンゴル東部の民族雑居地域であるジャライド旗とホルチン右翼前旗を対象に、1960 年代に中国共産党が実施した「四清運動」の動向を考察することで、当該地域におけるモンゴル人・漢人関係の一側面を明らかにする。②民族雑居地域である黒竜江省M市と遼寧省X県の朝鮮族に対する聞き取り調査を通じて、地域社会における民族関係を考察する。具体的には「満洲国」時代に関する記憶、戦後直後の混乱状況、建国後の地域社会における民族関係の日常、大躍進期の「民族連合社」における経済利益をめぐる矛盾などを検討する。③遼寧省新賓満族自治県において「満族」のアイデンティティが生成される過程を考察する。

ところで、本研究の前提として中華人民共和国建国以前の中国東北地域に存在していた「満洲国」での民族関係についても述べる必要があるだろう。「満洲国」は 1932 年 3 月に忽然と出現し、わずか 13 年 5 ヶ月後で姿を消すことになるが、その「建国宣言」では「凡そ新国家領土内に在りて居住する者は皆、種族の岐視、尊卑の分別なし。現有の漢族、満族、蒙族および日本、朝鮮の各族を除くの外、即ちその他の国人にして長久に居留を願う者もまた平等の待遇を享くることを得。そのまさに得べき権利を保障し、それをして絲毫も侵損あらしめず」と「五族協和」（日・漢・満・蒙・朝鮮の五民族を指す）をうたっていた。この「五族協和」は、孫文が共和体制の確立を目指すために唱えた「五族共和」（漢・満・蒙・回・蔵の五族を指す）のスローガンを意識したものといえるだろう[1]。

しかし、この「五族協和」の内実は、日本人を指導民族として位置づけるものであり、教育・兵役などの制度面でも日本人には特別な配慮が加えられていた。食事や乗車などをはじめ、目に見える差別は日常茶飯事であり、在満日本人自身も民族協和などまったく念頭にない日常生活を送っていた。日本人は日本人同士で固まり、自分達とは異なる民族との交流を拒絶する人が多かったのである[2]。

---

1 山室信一『キメラ―満洲国の肖像　増補版』中公新書、2004 年、131 頁。

2 塚瀬進『満洲国―「民族協和」の実像』吉川弘文館、1998 年、128 頁。

「満洲国」で最も多くを占めた民族は漢人であるが、満洲への移住は清王朝により長らく禁じられたため、彼らが本格的に流入し始めるのは19世紀以降である。特に1903年の東支鉄道の開業を契機として、山東・河北の漢人による満洲への移住が急増したのである。

また「満洲国」内のモンゴル人は80万人程度であり、総人口の2〜3%に過ぎなかったが、その生活空間は満洲全土の3分の1以上に及んでいた。そして、モンゴル人は漢人が牧草地に移住して来ることを歓迎しなかった。漢人は農耕民族であるのに対し、モンゴル人は遊牧民族で、宗教的にもラマ教を信奉するなど民族的な相違も大きかったからである。日本は日露戦争後、内モンゴルの東部に対して関心を持つようになっていた。

朝鮮人は19世紀末以降、豆満江を越えて中国東北地域やウスリー地方に流入した。朝鮮人移民の特徴は、教育に関心が高く、満洲に水田技術をもたらしたことである。「満洲国」時代の在満朝鮮人の政治的位置づけは、関東軍と朝鮮総督府の見解が異なるなどその地位は曖昧なままであり、複雑な政治状況のもとに置かれていた。また、社会的にも日本人からは亡国者と馬鹿にされ、漢人からは「二鬼子」(「日本鬼子」の手先という意味)との陰口を受けるという難しい立場にあった。そして、水田農民が大半を占める在満朝鮮人の生活実態をみると、大変な思いで開発した水田を日本側に買い上げられ、小作にならざるをえない場合さえあった。「満洲国」建国後に、朝鮮総督府は鮮満拓殖会社などを通して朝鮮南部の農民を計画的に満洲に移住させていた。

満洲人は1644年のヌルハチによる北京攻略後には関内に移ったため、その多くは漢化していた。満洲地域に残った満州人も、漢人増加の影響を受け、民族固有の伝統は衰退していた。そして、満洲人は辛亥革命の際には、漢人によって打倒対象とされたため、満洲人であることをひた隠しにする人も多かったが、その一方で文化的伝統を固守しようする満洲人もおり、民族としての一体性は分裂状態にあった。

「満洲国」の民族関係は、支配民族である日本人と被支配民族である漢人・モンゴル人・朝鮮人・満洲人による二元的対立関係ではなく、被支配民族のなかにも相互に対立が存在するという複雑な関係性のもとにあったのである[3]。

一、内モンゴル東部モンゴル人・漢人雑居地域における民族関係
―ジャライド旗とホルチン右翼前旗における「四清運動」を中心に―

モンゴル人・漢人の雑居は、内モンゴル地域の歴史的・地域的・民族的特徴の一つだといえる。この雑居により、モンゴル人・漢人の民族関係も政治・経済・文化・教育面など多岐にわたっているが、そのなかでも政治運動は、民族雑居地域における民族関係を示す重要な形である。ここでは内モンゴル東部のジャライド旗とホルチン右翼前旗を

[3] 塚瀬進『満洲国―「民族協和」の実像』吉川弘文館、1998年、109〜110頁。

対象に、モンゴル人・漢人の雑居地域における「四清運動」では何が焦点となり、またどのような者が攻撃・批判の対象となったのかを検討する。この検討を通じて当該地域におけるモンゴル人・漢人関係の一側面を明らかにできるだろう。

①内モンゴルにおけるモンゴル人・漢人雑居地域の形成

周知のように、内モンゴルは古来からモンゴル人が伝統的に牧畜業を営んできた地域であったが、清朝中期以降には北洋軍閥や国民党の歴代政権の放牧地開墾施策により、農業地域・半農半牧地域・牧畜業地域が並存する地域になった。さらに中華人民共和国成立後、民族政策の「黄金時代」とよばれる1950年代前半に、モンゴル人が牧畜業を営んできた放牧地に対し、漢人農民が放牧地保護の法令を無視して開墾を強行したため問題が多発していた。特に「極左」的な「三面紅旗」政策のもと、放牧地開墾の問題はますます深刻化し、農地化された放牧地の面積は急速に拡大した。その結果、1960年代初期には39旗・県が半農半牧地域であることに対し、純粋な牧畜業地域は21旗のみとなっていたのである。

ここで注目すべきは各産業形態の地理的分布である。地理的には南から北へ、農業地域・半農半牧地域・牧畜業地域の順に並ぶ状況となっており、農業地域は南の漢人地域と接近し、牧畜業地域は北のモンゴルやソ連と隣接し、半農半牧地域はこの両地域の間に位置づくことになったのである。一方、この過程において、先住民であるモンゴル人も長い歴史をもつ伝統的牧畜業から農業への転業を余儀なくされた。1949年の時点で、既に内モンゴルのモンゴル人の3分の2が農業に従事するようになっていたのである。

また人口構造の変化に目を向けると、近代以降の放牧地開墾と農地化にともなう漢人農民の入植により、漢人人口が内モンゴル総人口の絶対多数を占めていったことが分かる。すなわち、この地域の漢人人口は19世紀初期に100万人に至り、内モンゴル総人口の46.5%を占めるようになったが、1949年には内モンゴル総人口の84.8%、1960年には内モンゴル総人口の88.1%を占めるに至った。その原因は「大躍進」運動の時期に「辺境地域への支援」というスローガンのもと、漢人農民の内モンゴルへの入植がピークに達したからである。

上述のように、モンゴル人が居住していた地域に漢人農民が入植したことで、モンゴル人・漢人の雑居地域が形成された。また、内モンゴルの農業地域と半農半牧地域ではモンゴル人・漢人の民族雑居が最も典型的で普遍的な形態となった。そして、そうした地域では、モンゴル人と漢人が同一の人民公社・生産大隊・生産隊に編入され、同一の農牧場に組織されることはごく一般的なことであった。

②「四清運動」のプロセス

「四清運動」は、1963年冬から1966年にかけて内モンゴルの農業地域と半農半牧地域に属する生産大隊で展開された。これらの地域の「四清運動」は、内モンゴル党委の「四清

運動」の専門指導機関である「社会主義教育小組」（1963年11月13日に発足）の指導のもとに、各盟・市、旗・県、人民公社などの行政機関から5万7600人の幹部が招集された。「四清運動」はこれらの幹部により構成された「四清工作隊」の直接指導のもとで進められたのである。モンゴル人・漢人雑居地域における「四清運動」は、段階的に一部の地域で実施され、上から下へ、「四清工作隊」により推進された点においては他地域と変わらない。しかし、以下では民族雑居という事情のもとに展開された「四清運動」には、他地域と比べどのような差異が存在したかを、ジャライド旗とホルチン右翼前旗を対象に検討する。

ジャライド旗とホルチン右翼前旗は、モンゴル東部地域の典型的なモンゴル人・漢人雑居地域である。ジャライド旗の場合、1949年の時点でモンゴル人人口4万7165人に対し、漢人人口は5万1970人であった。1964年の全旗人口は20万7312人であり、7万5027人のモンゴル人および少数の朝鮮族・満族を除けば、残りのほとんどが漢人であった。ホルチン右翼前旗は、モンゴル人を主体とし、多数を占める漢人とその他の少数民族とが雑居する地域である。

ジャライド旗における「四清運動」は、1964年1月から1966年4月にかけて、中共華北局と内モンゴル党委の指導のもと、1778人の「四清工作隊」・「四清工作組」により、合計11の人民公社、30の大隊、243の生産隊の8264戸4万7674人を対象に実施された。「四清運動」と結合して民族政策の実施について検査が行われ、この検査を通じて民族政策を実施した際に多くの問題が生じたことが判明したのである。

ジャライド旗「四清工作団」の1966年4月の報告では、①農業を重視し牧畜業を軽視する傾向、②漢語公文書を使用し、モンゴル語の公文書を使用しない問題、③モンゴル人幹部が少ない、④少数民族向けの生活補助品を漢人農民に配ったなどの問題が生じていた。また、ホルチン右翼前旗党委政治部・統一戦線部の1966年5月の報告によれば、民族政策の実施上、①放牧地が大規模に開墾されたことにより、牧畜業に深刻な悪影響をもたらした、②モンゴル語・漢語を併用すべき党政機関の公文書（「文件」）は、モンゴル語が使用されなかったためモンゴル人大衆に支障をもたらした、③モンゴル人学校が少ないうえに、一般学校ではモンゴル語のクラスが設けられなかった、④モンゴル人は主体民族なのに、モンゴル人幹部・職員が少ないなどの問題が生じていた。

しかし、「四清運動」で焦点となったのは上述の民族政策の実施に関わる問題ではなく、モンゴル人の「自留家畜」の問題と宗教問題であった。アルバン・ゲル（阿尔本格勒）人民公社の前進大隊は、ジャライド旗のなかでも典型的なモンゴル人・漢人が雑居する大隊である。1950年末の人民公社化の際に、この大隊のモンゴル人農民１戸につき１～４頭の牛が「自留家畜」の形で個人所有として残されたが、そのうちモンゴル人農民の所有する「自留家畜」が、1966年4月の時点で十数頭にまで増えていた。これは牧畜業から農業に転業したものの、生活上、牧畜業に依拠することが多かったモンゴル人農民にとっては必要なものであり、また飼育の技術面でも可能であったと考えられる。しかし、「四

清運動」において「自留家畜」を所有するモンゴル人は、「階級立場に問題がある」として批判・攻撃の対象となったのである。

さらにモンゴル人の一般的な宗教活動も問題視された。モンゴル人は伝統的に仏教を信仰してきたが、仏教の聖地と呼ばれる五台山への訪問や、ダライ・ラマ、パンチェン・ラマへの参拝経験があるというだけで糾弾される事件が起きていた。

③「四清運動」のなかの諸問題

ここでは「四清運動」のなかで具体的にどのような問題が生じたのかを、実例を挙げつつ考察しよう。ホルチン右翼前旗グンボラグ牧場は、1959年4月に組織されたモンゴル人・漢人連合国営牧場である。5つの生産隊と1つの加工工場で構成され、牧場の職員労働者は412人で、このうちモンゴル人は304人で全体の74％を占めていた。58人の幹部のうちモンゴル人は27人で全体の42％であった。この牧場では以下のような問題が生じた。第一に、積極分子の育成問題である。「四清運動」の手順としては、まず「四清工作団」が積極分子を育成して組織し、そのうえで、この「四清工作団」と積極分子により運動が推進されることになっていた。しかし、この牧場ではモンゴル人が多数を占めていたにも関わらず、積極分子の多くが漢人であった。その結果、「漢人が運動を行い、モンゴル人は運動を見守る」（“漢族職工搞運動、蒙族職工看運動”）という状態になったのである。

第二に、幹部の「排隊」の問題である。幹部の「排隊」（列を作らせる）とは、「四清工作団」が幹部に対し「鑑定」と評価を行い、彼らを評価順に分けることである。最も評価の高い者が１類、低い者が４類となる。グンボラグ牧場では、3回にわたって「排隊」が行われたが、モンゴル人幹部の多くは３類、４類に分類され批判対象となった。第１回の「排隊」の結果、モンゴル人幹部に対する評価は３類と４類が総数の80％を占めた。「四清工作団」は、この分類結果が「不適切で、事実に符合しない」ことを認め、それを正す動きをとった。ところが第2回・第3回の「排隊」の結果でも、モンゴル人幹部のそれぞれ55％と40％は依然として3類と4類に「鑑定」されたのである。

第三に、幹部の「洗澡」と「下楼」の問題である。「洗澡」「下楼」とは、「四清運動」のなかで「工作組」が問題のある幹部に対し、大衆に向けて自己批判をさせることである。グンボラグ牧場では、モンゴル人幹部に対し一般的な過去の経歴問題、思想認識の問題、活動上の不足な点、生活上の問題などについて具体的分析もないままに不適切な一律化がなされ、批判対象にされた。さらに、その過程では漢人が批判や闘争の主催者になり、「漢人が運動を行い、モンゴル人が批判され攻撃される」（“漢人把関、蒙古人過関”）ことになった。例えば小学校教員のチメドとバイユサンは、漢人教員とよく団結していなかったという理由で「運動の障害物」（“運動的絆脚石”）と見なされ、全牧場大会で批判と攻撃を受け、生産隊への「下放」を宣言されたのである。

第四に、民族感情と「民族分裂」の問題である。グンボラグ牧場においては、ごく普通

のモンゴル人としての行動が「民族分裂」の徴候と見なされたのである。例えば漢人職員労働者の目の前で、モンゴル人職員労働者同士がモンゴル語で日常会話を交わすことさえ一律に「民族分裂」の事例にされてしまっており、７名で構成される牧場党委員会（漢人3人、モンゴル人4人）のモンゴル人幹部4人全員に「民族分裂者」というレッテルが貼られた。例えば牧場党委書記のマンドフーは、いわゆる「三つの偽り、三つの真」（“三假三真”）、すなわち「民族間の団結は偽りで実は民族分裂を主張する、貧農・下中農路線は偽りで実は地主・富農路線を主張する、社会主義は偽りで実は資本主義である」という「罪状」で「民族分裂」活動の代表者とされ、4つの生産隊の主要なモンゴル人幹部もマンドフーの「一味」（“同伙”）として批判されたのである。

第五に、モンゴル人が多数を占めるにも関わらず、全ての会議が漢語で行われたことであった。当時のモンゴル人の大多数は漢語運用能力が低かった。そのため漢語が不得意なモンゴル人には意見や建議を表明するチャンスさえ与えられなかったのである。

モンゴル人・漢人の雑居地域における「四清運動」は、従来の牧畜業から農業に転業してきたという特殊な状況を配慮してモンゴル人農民に認められていたはずの「自留家畜」の所有が問題として取り上げられた。また、古来の伝統的宗教に関わる一般的な行動さえも問題視された。そして、雑居地域の末端では、積極分子の育成、幹部の「排隊」「洗澡」「下楼」などの政治活動においてモンゴル人のごく普通の言動が「民族分裂」の徴候と見なされたのである。

二、地域社会における朝鮮族をめぐる民族関係
―黒竜江省M市と遼寧省Ｘ県での聞き取り調査を通じて

朝鮮族は、中国の 55 ある少数民族のなかでいくつかの重要な特徴をもつ。まず、朝鮮族は土着民族ではなく、比較的新しい時期に中国に移住してきた。朝鮮人の満洲への移住は、19 世紀後半、1910 年の「韓国併合」、1932 年の「満洲国」の成立を境として、この 3 つの時期に大きな波をなしている。清国は、1881 年に間島に対する封禁政策を廃止し、1885 年にはさらに間島を専墾区と設定して、移民を歓迎した。一方、朝鮮も 1883 年に豆満江封禁令を撤廃したことで、朝鮮人の間島への移住は急速に進んだ。移住の原因は多くの場合、朝鮮での生活難によるもので、朝鮮で飢饉が起きた年には移住者が増える傾向が見られた。「韓国併合」前後には、政治的理由から逃れてきた人々もいた。朝鮮内で展開された義兵部隊の一部が満州やロシア極東領に逃れ、そこを拠点に抵抗を続けたことがその例である。彼らは、移住農民の子弟に対する教育活動を基盤にして、独立運動の勢力を拡大させ、三・一独立運動後には満州で活発に武装闘争を展開していた。「満州国」成立後は、日本による政策的移民を中核として、満州への朝鮮人移民は急速に増大して、解放直前には 200 万人以上となった。そして、第二次世界大戦の終結やその後の朝鮮戦争などにより、出身地域との出入りも激しかった。また、中国

の革命運動に参加した朝鮮人が多いなど、常に東アジア近現代史の渦中に置かれていた。さらに、改革開放政策の実施と中韓国交樹立以降、韓国への出稼ぎと中国東沿岸都市部への移住が著しくなり、朝鮮族社会には劇的な変化が訪れているのである。

下記のインタビューは、黒竜江省のM市近郊と遼寧省Ｘ県で行った。M市は東支鉄道の敷設により形成されはじめ、1934 年の図寧線の開通と 1937 年の図佳線の開通とともに多くの日本人と朝鮮人が移民し、のちには関東軍の拠点の一つとなった。M市の朝鮮人人口は、1932 年には 61, 338 人であったが、1940 年には 144, 783 人、1943 年には 256, 642 人と増加した。1980 年代、黒竜江省にある 499 の朝鮮族村のうち、176 はM市に位置していた。一方、遼寧省 X 県は満族の他に漢族、朝鮮族、シボ族、モンゴル族などが居住している。19 世紀の末からは徐々に朝鮮からの移民が増えはじめ、1920 年には移民のピークを迎え、13, 326 世帯、65, 222 人に達した。また、「満洲国」時代、土地開墾のため日本が朝鮮人の満洲移民を組織したことも、朝鮮族の人口が増加した原因の一つとなった。

ところで、「満洲事変」以降 X 県は南満洲における朝鮮人の抗日根拠地となり、数多くの朝鮮人が X 県に抗日団体や武装組織を作った。朝鮮人の抗日軍政幹部を養成する化興中学校は旺清門の町のなかにあった。梁瑞峰を総司令官とする朝鮮革命軍と李春潤が率いる抗日義勇軍が連合して抗日闘争に臨んだ。当時は、朝鮮独立団の司令部が旺清門江南二道溝に設置されていた。当然、X 県には日本の警察署があり、監獄もあった。当時は村ごとに警察署があり、独立団の行方を警察署に報告しないと捕まり、県城に連れて行かれては拷問された。

なお、プライバシー保護のため、ここでは人名・地名はアルファベット表記とする。地名は、例えば北京市ならＢ市、人名は例えば鄧小平ならＤＸＰと表記する。◆の部分がインタビュー内容である。

①戦前に対する記憶

◆日本人校長

黒竜江省Ｑ県の朝鮮人学校に通った。最初は朝鮮語と日本語の授業があって、朝鮮語で朝鮮の歴史と地理を学んだ。中国語は教科に入っていなかったので、今もしゃべれない。数年後に朝鮮語が禁止され、朝鮮語をしゃべると狗の輪を首にかける罰を受けることになった。そのうち全員の名前も日本語に変えられ、ぼくは「ハヤシ・エイテツ」になった。

学生と教師は全員朝鮮人だったが、校長だけはミナミモリという日本人だった。彼は大変厳しい人で、よく学生を殴った。彼は「ジンオモウニ ワガコウソウコウクニヲ ハジメルニ」（教育勅語だと思われる）をみんなに暗記させて、おごそかに儀式を取り仕切った。「テンノウヘイカノ タメナラ ナンノ イノチガ ホシイ」（軍歌「露営の歌」の 5 番だと思われる）もよく覚えさせられた。今もその意味が分からないが、日本語で覚

えている。日本人校長がきてから制服を作らせられ、経済負担が増えた。学生のなかには 20 代、30 代の人も多く、彼らは校長をやっつけることに成功し、そのうち校長はいなくなった。
（インフォーマントの姓名：ＬＹＺ（1927 年生まれ)、職業：軍人・黒竜江省M市某村の生産隊隊長、性別：男性）

◆住居は民族別

黒竜江省Ｂ県郊外の朝鮮人村で育って、隣の漢族村の子供と交流することはなかった。町を歩くと漢族の子供たちに「高麗棒子」（朝鮮人への差別用語）と言われた。日本人は戦前、町のなかで暮らしていたと聞いたことがある。
（インフォーマントの姓名：ＪＹＳ（1936 年生まれ)、職業：黒竜江省Ｂ県朝鮮族小学校校長、性別：女性）

◆「併村」と「三光」政策の被害

私は 1933 年にＸ県四道溝村の農民の家庭に生まれた。1935 年頃、日本軍が村にやってきて「併村」と「三光」政策（「殺光」（殺しつくす)、「搶光」（奪いつくす)、「焼光」（焼きつくす）という意味）を実施し、山奥に家がある者は全て強制的に村の中心部に移転させられた。引越しが少しでも遅れた場合は、家屋に火をつけられたりしたものだ。私が三歳頃のことだった。家族一同が引越しの準備をしていた時に、日本人に火をつけられ、私だけが部屋に閉じ込められた。兄が部屋に飛び込んで助けてくれなかったら、死ぬところだった。

父はその後、日本の警察に捕まえられて七ヶ月間牢屋に入れられた。朝鮮独立軍の手伝いをしたというのが理由だったらしい。
（インフォーマントの姓名：ＪＳＺ（1933 年生まれ)、職業：遼寧省Ｘ県共産党幹部・Ｘ県食糧局副書記、性別：女性）

◆民族間の社会経済関係

日本人は警察のほかにその家族もいた。

旺清門小学校にもマツヤマという日本人の男の先生がいた。

旺清門の農場にも日本人がいた。彼らは中国人（漢族）の地主から強制的に土地を買い取り、農場を作っていた。朝鮮人の小作人に土地を貸して地租と糧食を徴収した。最初は全部畑だったが、朝鮮人が数年かけて畑を水田に変えた。地租は水田の方が多く、地税は主に糧食を納めていた。

戦時期には、藁でかます（叭）を作って日本軍の前線に送った。世帯ごとに任務が課されたが報酬があったので、朝鮮人は金稼ぎのためによく働いた。かます作りは朝鮮人の得意技だった。中国人はかますの作り方を知らなかった。

中国には藁がなく、中国人は水田の耕作方法を知らなかったからだ。彼らはのちに朝鮮人から水田耕作を教わった。土地改革の際に土地分配があったが、中国人は水田を分配されるのを嫌った。冷たい水に入って働くのが嫌いだったからだ。
（インフォーマントの姓名：ＪＹＣ（1929 年生まれ）、職業：遼寧省Ｘ県共産党幹部、性別：男性）

◆壮丁として連れていかれた兄

1944 年に、20 歳になる一番上の兄は日本人に壮丁として連れて行かれた。

1945 年 8 月のある日曜日、大人達から「大東亜戦争が休戦した」「学校ももうすぐ夏休みに入る」ということを聞いた。この日から大きな刀を腰にかけて旺清門の大通りを行き来していた傲慢で横柄な日本の警察は姿を消し、警察署も閉まった。替わりに黒い制服を着た中国人警察が来た。

日本人に連れ去られた兄はこの時には戻っていた。
（インフォーマントの姓名：ＺＷＳ（1932 年生まれ）、職業：遼寧省Ｘ県共産党幹部、性別：男性）

②終戦直後の惨事

解放後の東北地域は、権力の真空状態となって無秩序であった。都市では、一応はソ連赤軍が治安を維持していたが、東北地域朝鮮人の 8・9 割が居住していた農村は無政府状態で、事実上土匪たちが支配していた。土匪は、日露戦争後から東北地域で活動しはじめたという。解放後の土匪は、おもに解体された「満州国」の警察・憲兵、武装地主、地元のヤクザなどで構成され、日本の敗戦時に民間に流入した武器を獲得して、一層活発な活動をしていた。とりわけ、1945 年 11 月に国民党軍が東北に進出してから、1946 年 5 月ソ連赤軍が東北から撤兵するまでの半年の間、土匪の活動はもっとも活発であった。

この間、これら土匪は、「朝鮮人は日本鬼子（グイズ）の共犯」という理由で、「朝鮮人を全部追い出」そうと、一般の朝鮮人大衆に対し、迫害ないし虐殺を行った。解放後、東北地域朝鮮人社会に引き起こされたさまざまな混乱と悲劇の度合いは、朝鮮国境に近い延辺よりも、北満州（主に現在の黒竜江省）に入植させられた朝鮮人開拓農民に強い。それは、朝鮮人開拓農民の北満州への入植によって、現地中国人の土地が奪われたことが主な原因であろう。また、北満州は東北地区のなかでも、土匪がもっとも活躍した地域であって、1947 年 4 月現在北満州の 3 分の 2 以上の県城は土匪に掌握されている状況であった。下記の二つの事件が典型的である。

・謝文東部隊による朝鮮人虐殺事件

謝文東は黒竜江省依蘭県人で、有名な大地主である。日本の強制的土地買収に対抗し

た「土竜山事件」を指導して、その 3,000 人の武装勢力をもとに東北民衆自衛軍を結成した。1936 年 9 月に共産党に帰属し、東北抗日連軍第 8 軍軍長に任命された。しかし、1938 年日本軍に捕まえられて投降した。昭和天皇から、金の菩薩をプレゼントされたという。日本敗退後は、共産党に帰順することを約束し、三江人民自治軍司令になったが、1945 年 12 月中旬に国民党に寝返った。密山を拠点に当地住民とりわけ朝鮮人にたいして、無茶苦茶に略奪、殺人、暴行を行っていた。1946 年 12 月、共産党によって死刑に処された[4]。

村民が全員虐殺されたケースとして、牡丹江地区のオハリムという村がある。リキョンフム[5]さんの話によれば、「牡丹江一帯には謝文東という有名な匪賊の頭がいて、奴の率いる匪賊は朝鮮人を日帝統治下の「二等公民」だと言って、見つけると斧で殴り殺していた。

◆謝文東部隊と戦った次兄

次兄は「満洲国」時代に日本に徴兵され、チチハル兵站で解放を迎えた。なんとか家に戻ってきたが、すぐ謝文東の土匪部隊との民族間の戦いに参加した。この事件でたくさんの人が死んだと聞いた。

次兄は死から逃れた後、チャムスの朝鮮民主連軍に入隊した。砲兵として吉林、長春の戦闘に参加し、朝鮮戦争開戦初期に朝鮮南部の慶尚道、全羅道で行われた戦闘で犠牲になった。

（インフォーマントの姓名：ＪＹＳ（1936 年生まれ）、職業：黒竜江省Ｂ県朝鮮族小学校校長、性別：女性）

・東安虐殺事件

1946 年の春、ソ連赤軍が東北地域から撤兵し始め、国民党は長春・四平など戦略要地をめぐる中共との戦いに勝利するが、それは土匪たちを元気づけ、土匪の朝鮮人に対する暴行はさらに拡大した。そのなかで、「5・26 東安虐殺事件」が起こった。1946 年当時、東安（現黒竜江省密山市）には武装した郭興典土匪部隊があり、彼らは朝鮮人を恨んで苦しめた。1946 年 5 月 14 日の深夜、郭匪賊は東鮮、東明、東興など三つの朝鮮人村の老若男女をほとんど虐殺し、家屋は全部焼いた[6]という。

1946 年 5 月 26 日の夜、700 余人ほどの郭興典土匪部隊は、城内の漢族住民たちを扇動して、内外で呼応して、急に東安城を襲撃した。彼らは、入城後「朝鮮人の種を無くす」と言いながら、普通の朝鮮人住民に対し無差別な大虐殺を行った。一日で数百人が殺害され、数百戸の朝鮮人が財産を捨てて、ソ連と朝鮮に逃げ、駅の隅には朝鮮人の死

4 田志和・高楽才『関東馬賊』吉林文史出版社、1992 年、長春、327～330 頁。
5 リキョンフム　男性、1920 年生まれ、本籍は京畿道京城府、1989 年現在、瀋陽市崇山東路に在住（中国朝鮮族青年学会『中国朝鮮族移民実録』延辺人民出版社、1992 年、125 頁）。
6 王元年『東北解放戦争鋤奸剿匪史』、145 頁。

体が山のように積もっていたという。東安の付近の朝鮮人村も襲撃されたが、幸いみなうわさを聞いて避難していたようだ。

◆当時密山に住んでいたが、ソ連が攻めてくるというわさがあった。日本人は町にある橋を壊したが、ソ連のタンクは大変強くて、難なく河のなかに入り、タンクの上にタンクを乗せることもできた。

近くの密山市内では大変な事件があった。町のなかに住んでいた朝鮮人が暴徒化した中国人にたくさん殺され、東にある池が血に染まった。朝鮮人は日本時代に「二等国民」として扱われたため、戦後中国人に報復された。田舎では民兵をつくって村を守ったので、大丈夫だった。

（インフォーマントの姓名：ＬＹＺ（1927 年生まれ）、職業：軍人・黒竜江省某村の生産隊隊長、性別：男性）

・遼寧省Ｘ県の事例

◆私は 12 歳の時に朝鮮から中国に渡ってきた。Ｘ県における朝鮮族と漢族の関係だが、最も緊張した時期は「満州国」の崩壊直前と直後だったと思う。日本人が中国東北地方を占領したあと、離間政策を実施したからだ。日本人は一等国民、朝鮮人は二等国民、それ以外は三等国民に扱われた。

日本人が投降した直後の 8 月 15 日の深夜、村の中で銃声が聞こえた。夢から目が覚めた私は何が起きたか分からなかった。まだ 14 歳だった。わたしは怖くて外に出ることもできなかった。

後で聞いた話によれば、漢族が「この『高麗棒子』め、お前ら二等国民だろ。日本人はもう投降したんだ、お前らも朝鮮に帰れ」と叫びながら朝鮮人を襲ってきたそうだ。朝鮮人が反抗すると殺されることもあったという。朝鮮人の家財や牛も漢族に奪われた。

これはもう過去のことだ。共産党が政権を取り新中国が誕生し、民族政策を実施してから、このようなことは二度と起きなかった。

（インフォーマントの姓名：ZWS（1932 年生まれ）、職業：共産党幹部、性別：男性）

③中華人民共和国建国後の民族関係の日常

◆生産隊隊長などの村幹部をやったが、隣の漢族の村とはあまり交流がない。

村で漢族と結婚した人はいない。

漢族と朝鮮族の若者同士で、生活問題でけんかをしたことはあった。

（インフォーマントの姓名：ＬＹＺ（1927 年生まれ）、職業：軍人・黒竜江省某村の生産隊隊長、性別：男性）

◆結婚相手は、漢族村に住んでいる朝鮮族の人だった。その村には朝鮮族が 16 戸だけ住んでいて、漢族は畑作を、朝鮮族は水田をやっていた。村の漢族女性は私を歓迎してくれたが、自分は中国語があまりできず、中国式の食事にも慣れなかった。
（インフォーマントの姓名：ＬＳＦ（1942 年生まれ)、職業：黒竜江省某村の婦女隊長・主婦）

◆自分は黒竜江省の朝鮮人村で生まれ、村の小学校を卒業するまで中国語はできなかった。漢族の子供と交流することもあまりなかった。
（インフォーマントの姓名：ＪＺＤ（1943 年生まれ)、職業：黒竜江省の公社幹部・朝鮮族師範学校学長、性別：男性）

◆父は北部の伊春の森で、伐木労働者として働いた。朝鮮人労働者たちは集まって住んでいて、自分たちのコミュニティを形成していた。朝鮮人は伐木の経験と技術があったため、作業の中心となった。
大人たちは朝鮮語をしゃべったが、子供はなぜかみんな中国語をしゃべった。
朝鮮族と漢族の大人たちの間は、特に問題がなかった。しかし子供たちは民族に分かれて、群れでけんかをすることがあった。5, 6 歳の時に漢族の子供と遊んだ時には、「高麗棒子」（朝鮮人への差別用語）とよく言われた。言葉がカギで、コミュニケーションがとれるようになると民族関係がよくなる。
国も民族差別を禁止した。漢族の中には、もちろん少数民族に友好的な人もいれば、そうでない人もいた。
（インフォーマントの姓名：ＬＣＬ（1946 年生まれ)、職業：文革期の軍人・黒竜江省Ｂ県人民代表大会常務委員会副主任、組織部長、性別：男性）

◆私が育った黒竜江省の村には漢族 300 戸、朝鮮族 90 戸が住んでいたが、住居はそれぞれ分かれていた。お互いに往来することは多かった。漢族の人が朝鮮族に野菜を売ることがあり、お互いにお金の貸し出しもした。朝鮮族の中国語は下手だったが、生活に不便はなかった。父は簡単な中国語しかしゃべれなかったが、王氏という漢族の料理人と友人だった。
結婚は朝鮮族同士ですることが当たり前だった。当時の二つの民族間の生活習慣の違いは大きかった。朝鮮族は一般的に教育重視で、清潔好きだった。
しかし、問題もあった。1960 年前後までは、村に漢族の子供たちが群れで現れ、朝鮮族の子供を殴ることがときどきあった。村の商店は漢族居住地にあったので、朝鮮族の子供たちは怖くて買い物に行けなかった。漢族の子供がいない隙をみて、すばやく走って行った。総じて朝鮮族は圧倒的に力が弱かった。漢族が棒を振り回して、なにかしらのケチをつけて「打！打！（殴れ！殴れ！)」と村中を駆け回っていたことを覚えて

いる。村には漢族に殴られて、歩けなくなった朝鮮族のおじさんがいた。
　共産党の民族政策のおかげで、その後には好転した。
（インフォーマントの姓名：JYA（1951 年生まれ)、職業：黒竜江省Ｂ県小学校教師・飲食店経営、性別：女性）

◆朝鮮族学校に通っていて、中国語授業は一日一回だった。
　隣の漢族村との接触はほとんどなかったため、矛盾もなかった。
　自分は就職するまで、漢族と付き合う機会はなかった。
（インフォーマントの姓名：ＹＪＳ（1952 年生まれ)、職業：黒竜江省Ｈ市水利施設の職員・企業経営者、性別：男性）

④大躍進期の経済利益をめぐる矛盾

1956 年党中央より､民族雑居地域では民族連合社を組織できるという指示があった。東北各地の地方政府はこの農業集団化過程において、水田と畑、漢族農民と朝鮮族農民が結合された民族連合社を大量に組織することになる。民族連合社は、民族地区ならではの取り組みであり､メリットとしては朝鮮族の稲作と漢族の畑作の長所を発揮して互いに助け合い、「階級的友愛精神」で生産性を高めることが想定されていた。もう一つ言及しなければならないことは、東北各地の地方政府による水田開発の狙いである。

黒龍江省の朝鮮族のほとんどは稲作を営んでおり、朝鮮族村は「水稲之郷」と呼ばれていた。1953 年黒龍江省の朝鮮族人口は 231,510 人で、1980 年代までに彼らは主に、50-200 戸規模のほとんど朝鮮族からなる 500 個前後の村に居住しており、相互の協力が必要とされる稲作に従事していた。黒龍江省では 1956 年までに 600 個余りの朝鮮族高級社が成立されたが、その内 400 余りは漢族との民族連合社であった。

しかし、民族連合社は一年も経たない内に、大きい試練を迎えることになる。収入分配の問題をはじめ、各民族間の生産技術や生産・生活習慣、言語・文化の差異が大きく浮かび上がってきたのである。朝鮮族農民が行っていた稲作は、冷たい水に長時間入るなど労働量が大きく、技術力も求められるが、そのかわりに、稲作は収穫量が多く、単価も高く、収益も大きかった。ゆえに、一般的に連合する前の朝鮮族農民の収入は畑作の漢族農民より 1－2 倍多かった。民族連合社になってから、稲作と畑作の労働点数の設定が不合理であったため、朝鮮族農民の間では、高級社では水田が増え、水稲も増産し、仕事は増えたが、収入は減ったと考えられるようになって労働意欲が低下した。一方、漢族農民と一部の幹部は、「朝鮮族は過去に収入が多すぎた。社会主義は平均主義だ。一律に統一分配すべき」だと主張した(『延辺日報』1956 年 7 月 10 日)。漢族の生産隊と朝鮮族の生産隊の間では、異なる民族の幹部と社員、幹部同士の矛盾が多発し、民族別に構成してほしいとの要求が多く出された。例えば、五常県には 26 個の民族連合社が成立したが、収入分配の問題で厳しい局面を迎えた。一部の民族連合社は生産さ

えも中止して、収入の分配問題を議論し、18 個の民族連合社の朝鮮族が単独で合作社を運営することを要求した(『延辺日報』1957 年 1 月 29 日)。

◆漢族は畑作を、朝鮮族は水田を耕す。

人民公社期は、漢族村と朝鮮族村が農作業は別々にやって、秋は同じく分配する仕組みだった。これは不平等で、朝鮮族が損をした。朝鮮族の水田耕作の労働量は大きく、お米は価格が高かった。

(インフォーマント姓名:ＰＸＹ(1939 年生まれ)、職業:黒竜江省某村の看護婦・生産隊隊長の妻)

◆村には漢族 300 戸、朝鮮族 90 戸が住んでいたが、住居はそれぞれ分かれていた。朝鮮族村は 1930 年代に慶尚道の人たちがやってきて開拓したと聞いた。漢族と朝鮮族の生産隊も別れており、漢族の生産隊のトップは漢族、朝鮮族の生産隊のトップは朝鮮族だった。

合作社の時に漢族は稲作と畑作を同様に分配しようとした。朝鮮族が損することが明らかだった。また漢族の泥棒が群れで朝鮮族の水田に入り、大っぴらに稲を盗むこともあった。ある日それを見かけた母が一生懸命追いかけて、稲を取り戻したことがある。

(インフォーマントの姓名:JYA(1951 年生まれ)、職業:黒竜江省Ｂ県小学校教師・飲食店経営、性別:女性)

地域社会における大衆レベルの民族関係は、言語、慣習などのソフト面だけでなく、土地と収入の分配という切実な経済的な利益にかかわるときこそはっきり現れたのである。

三、「満族」としてのアイデンティティの生成
―新賓満族自治県を中心に―

中国全土を 267 年間統治してきた清朝は、八旗という特殊な軍事、政治、行政的制度をもってそれを実現してきた。清朝の為政者らは、常に自らの伝統文化の保護と漢文化受容のジレンマのなかで政権を運営してきた。また、満・漢通婚禁止や東北地域への移民禁止などの措置も取られたが、事実上無視された。とくに、八旗制度に膨大な漢人を組み込んだという事実もあったように、その「文化の伝統性」の維持は大きな問題であったことに間違いない。

こうした軍事・政治的カテゴリーであった「旗人」が、民族集団に転化されはじめたのは 19 世紀末の太平天国および 20 世紀初の辛亥革命であった。清朝打倒を企てる革命運動は、かつての反清運動だった太平天国がそうであったように、「中国」と「漢」と

を並置することによって、漢－満対立の構図に立脚し、排満を志向した。当時の社会では多くの場合、旗人は事実上清朝政権と同一視され、政治的・民族的差別を受けるようになり、漢満間の緊張関係は頂点に達した。就職や進学など多くの面において、旗人であるために受ける不利益が多かった。このような状況のなかで、ほとんどの旗人は満族姓を漢姓に変え、自分が旗人であることを隠し続けた。民国時代の旗人人口は、清朝末期の 4～500 万から 150 万に激減したが、人為的な身分の隠ぺいが大きな要因の一つであろう。

中華人民共和国建国後の 1950 年に「旗人」は少数民族として位置づけられ、その名称も正式に「満族」に変えられた。中国共産党の民族政策実施に伴う満族の政治的地位の変化や経済生活の改善などが満族人口の増加を促す原動力となった。現代の満族の状況を以下のようにまとめることができるだろう。①東北地域と北京を中心に全国に分散居住、②満文満語の基本的消滅、③漢族と一体になった経済生活、④満族文化の漢化、⑤満漢通婚。満族がなお一つの民族として存在しているのは、もっぱらその民族意識によって支えられている。

ここでは、満族の故郷と呼ばれ、清朝の発源地として位置づけられている遼寧省新賓が、1985 年に初の満族自治県として成立以降、満族人口が急激に増加した一連のプロセスを考察することで、現代満族のアイデンティティの一側面、つまり実利的側面を描く。新賓満族自治県は遼寧省の東部の山岳地帯、長白山脈の延長線上に位置し、15 の郷鎮、14 の国営林場、258 の行政村を管轄している。

2000 年現在の総人口は 30.8 万人で、満族は 70%以上を占める。しかし、1982 年の時点で、満族の人口は県の総人口の 33%であった。民族自治県を成立させるには、少数民族人口が過半数に達する必要があった。県政府は民族政策の宣伝の傍ら、民族籍の再登録を実施した、満族と名乗り出る人なら誰でも満族として認定されるようになり、三代前まで遡っても旗人とは何の系譜的関係もない者まで満族として登録された。

少数民族の身分は個人にとっては、厚生政策の面における実利であった。例えば、夫婦の双方が農村戸籍の場合に出産制限の緩和、大学の全国統一試験におけるポイントの加算などのメリットがあったため、満族自治県成立以後も満族籍への変更が絶えなかった。

実際に、日常生活において、人々は常に民族籍を意識しながら生きているわけではない。新賓の満族のエスニックの境界は必ずしも明確なものではない。満漢の通婚はごく普通に行われていて、日常生活における民族間の対立は見当たらない。彼らのアイデンティティは常にエスニック境界の間で揺れ動いており、これらのエスニック境界の形成には国家の関与が常に伴っているのである。

謝辞

本報告書は「公益財団法人 JFE21 世紀財団」2014 年度「アジア歴史研究助成」の交付を受けた研究成果です。JFE21 世紀財団よりこの貴重な機会をいただいたことに感謝を申し上げます。

参考文献

王柯『多民族国家　中国』岩波書店、2005 年。
加々美光行『中国の民族問題―危機の本質』岩波書店、2008 年。
塚瀬進『満洲国―「民族協和」の実像』吉川弘文館、1998 年。
毛里和子『周縁からの中国―民族問題と国家』東京大学出版会、1998 年。
山室信一『キメラ―満洲国の肖像』中公新書、2004 年。
李海燕「中国朝鮮族社会における土地改革と農業集団化の展開（1946-1960）」『相関社会科学』（東京大学大学院総合文化研究科国際社会科学専攻）第 22 号巻、2013 年 3 月。
―― 『戦後の「満州」と朝鮮人社会―越境・周縁・アイデンティティ』御茶の水書房、2009 年 9 月。
劉正愛『民族生成の歴史人類学―満洲・旗人・満族』風響社、2006 年。
リンチン『現代中国の民族政策と民族問題―辺境としての内モンゴル』集広舎、2015 年 10 月。
――　「内モンゴル東部モンゴル人・漢人雑居地域における民族関係に関する一考察――ジャライド旗とホルチン右翼前旗における「四清運動」を中心に――」2015 年度アジア政経学会秋季大会口頭発表、2015 年 10 月 17 日、常磐大学。
――　「1950 年代のホルチン右翼前旗における民族政策の実施の実態――モンゴル語の使用と民族幹部の育成、採用」『日本とモンゴル』第 50 巻第 1 号、2015 年。